

第3回 本橋哲也著『映画で入門 カルチュラル・スタディーズ』

第17章 『プロスペローの本』 監督 ピーター・グリーナウェイ、1991年、イギリス/フランス

大下の疑問

1. P253 「この映画でキャリバンを演じているのは——」以降、これはシェイクスピアのテンペストとこの映画を比較し、「映画におけるキャリバンの描き方は劇に勝っている」と言いたいという理解でいいのだろうか。

2. P259 「帝国と植民地支配の終焉を、自立した自己が応答すべき他者と共生し得る新たなポストコロニアル世界としてどのように構想できるのか、という問いだろう。」の解釈ができなかった。

↓以下授業内の発言等↓

☆ピーター・グリーナウェイの三部作

- ・『ベイビー・オブ・マコン』
- ・『プロスペローの本』
- ・『ピーター・グリーナウェイの枕草子』 →舞台装置的で身体に対す描写が独特

☆本橋さんの論文の全体像を把握する

- ・前回は二項対立的であったが、今回はどのようなようであるか
→二項対立を抜き出して考える

支配・被支配 / 王女・王子 / 貴族・庶民 / 自国・他国 / 兄・弟 / 人間・人外（妖精） / 言葉・身体 / 処女性・性的搾取 / 正史・叛史 / 応答・発言 / 水・火 / 残存・消滅 / 西洋・東洋 / 魔法・理性 / 男・女

・こうしてみると、本橋さんの論文では、支配関係や権力の構造は脱構築しているように見えた。一方で、男女の問題や帝国の女性に及ぶ力の面では、構造が存在するままである。

☆脱構築されなかったジェンダーについて

- ・本橋さんは、帝国の要であると言いながら、王女の女性性を男性性による権力から脱させようとはしていない。ミランダが「帝国的レイプ」を受けていること、プロスペローの帝国的支配にはミランダは生殖機能の面において欠かせない存在であることは明示されるが、彼女が脱構築の操作を受けることはない。
- ・また、ミランダとクラリベルの対照の部分で、クラリベルの嫁ぎ先を「彼女がチュニスの黒人の王のもとで激しい性的搾取の対象になること」と書いている。再検討が必要だ

が、あまりに黒人＝野蛮であることを固定化した文章ではないか

・そもそも脇に登場するキャラクターが男女問わず全裸で登場するこの映画は、すでに性における部分でも脱構築を試みようとする意志が見受けられるのではないか。また、エアリアルだけが性器を隠し、男性であるか女性であるかすらも考えさせない中間的存在であることから、脱構築的であると考えられるはずである。本橋さんはなぜこの映像表現を見過ごしたのだろうか。

☆エアリアルの存在について

エアリアルとは、キャリバン VS プロスペローの対立における第三項である。支配・被支配の連続において、その進行を自らの声によってせき止めるのだ。

プロスペローがエアリアルの声を聞き、納得し、受けとめることが映像内の脱構築である。自分とは異なる他者に自己性があることを、プロスペローは三回問いを投げかけることで理解する。

☆応答する責任とはなにか

P256 「エアリアルの発話に始まる解放のプロセスを、プロスペローによる「許し」や「和解」といった枠だけで考えるべきではないだろう。この映画の中でこの瞬間が重要なのも、応答する責任がつねに他者からやってくるという主題を、この場面が描いているからだ。」「プロスペローに代表されるようなつねに覇権的強者である自己は、それに応答しない権利も有している。だがこの場面でのプロスペローは、自らの帝国における被支配者であるエアリアルが、さらに弱者であるアロンゾたちに向けた視線を自分のものにすることによって、彼らを牢獄から解放する。」「そのプロセスは今まで自分自身の声を持たなかったものの声を聞き取り、その声を模倣することから始まる。」

A……プロスペロー

A' ……他者 (エアリアル) (他者は自己の鏡のような存在)

B……全く知らない他者のもう一つの他者

A / A' AはA'と同じ言語で会話

↓

A / A'→B しかし、A'は他者Bであることに気づく

↓

A / B AはBの言語を模倣によって獲得

他者に対する責任…自己の枠組みのなかでの他者A'なのではない、他者としてのBに対して応答し、Bの言語を獲得することでAだけでなくBも獲得すること。

例えば、会社の中で「欠席は相当の理由がなければ認められない」という論理があるとす
る。上司は冠婚葬祭などの重要行事以外は今まで欠席を認めてこなかった。また、部下も
その論理に従い、欠席を申し出ることもなかった。上司は会社を運営する責任があり、そ
のためには働き手がいることが重要である。しかし、ある日突然部下のひとりが「子供が
熱を出したため、明日は欠席をしたい」と申しでる。部下にとっては家族に対して責任が
あり、その責任の論理を会社の上司に持ちだしたことになる。上司はこの申し出に対し受
け付けられないこともできるが、「そうか、君は休みたいのか」と三回唱えたため、(映画を踏
襲) その部下の論理を獲得することができた。自分の論理と一致しない人の論理に、いか
に想像を働かせられるのかは、重要である。

☆大下の疑問について

1 劇『テンペスト』では、キャリバンの語りはキャリバンが行う。しかし、この映画で
はキャリバンの台詞もすべてプロスペローが乗っ取り、彼が声色を変えることで私たちは
誰の台詞なのかを理解していた。言語による帝國的支配の様子がより分かりやすいのは映
画である、ということが言いたいのであろう。

2 自立した自己＝プロスペロー、応答すべき他者＝キャリバン ポストコロニアル世界
＝支配・被支配の関係をなし崩しにしても、結局解放されていないという意識がある。
前回学んだことに繋がるが、キャリバンの行為の評価すべき点は、「沈黙の身振り」であ
るということ。自国の言語で話をする 것도、翻訳された言語で話をする 것도、どちら
の行為でも支配・被支配の関係が取り払われた状態とは言えないだろう。支配から解放さ
れ、自分の言葉を獲得したからといって、自国の言語で自己開示をしても、誰にも伝わら
ない。また、翻訳の言語を用いて自分の思いを伝えても、それでは支配の解放をうけたこ
とにならない。そうしたなかで「身体による言語」を用いることは、最適かつ脱構築的な
行動だといえる。

→論文としてとても評価できる着眼点！